キャラクター名
冬至晴一（トウジ ハルイチ）

プレイヤー名

シンドローム	キュマイラ キュマイラ	ワークス	高校生	カヴァー	不良の高校生
オプショナル		年齢	17か18	性別	男
覚醒	感染	衝動	飢餓	初期侵食率	28 %
出自	天涯孤独	経験	死と再生	邂逅	友人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	6	1	1	4		12
感覚	0	0	1			1
精神	0	0	1			1
社会	2	0	0			2

HP	45
行動値	3
(非装備時)	3
戦闘移動	8
全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	4		射撃			ＲＣ	2		交渉		
回避	2		知覚	1		意志	3		調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：噂話	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
素手	白兵	12r+4	1	21		9+4+8（爪LV1+剛身LV2+D羅刹）
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ：噂好きの友人	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
羅刹(タイラント)	P	N		
七海弓花	P 親近感	N 不安		
八重樫若菜	P 慕情	N 嫉妬		
佐和山（済）	P	N		
里見 悠斗	P	N		
鵺(井早頼政)	P	N		
漣 匠馬	P	N		

最大財産P: 4	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
コンセントレイト	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果：	クリティカル値:-LV(下限7)							
破壊の爪	1	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：	シーン中:<白兵> 攻:+[LV+8] ガード:1 至近							
剛身獣化	5	6	マイナー	至近	自身	自動	ピュア	
効果：	シーン中:攻:+[LV*2] 装甲;[LV*3]							
ハンティングスタイル	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：	1シーンにつきLV回:戦闘移動							
獣の力	1	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果：	攻撃 <白兵> 攻:+[LV*2]							
復讐の刃	2	6	オート	至近	単体	対決	-	
効果：	リアクション直前:白兵攻撃 クリティカル値-LV リアクション放棄							
フルパワーアタック	3	4	セット	至近	自身	自動	80↑	
効果：	ラウンド中:行動値:0 攻:+[LV*5]							
完全獣化	3	6	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：	シーン中:【肉体】判定のd+[LV+2]							
獣の王	1		メジャー		単体	対決		
効果：								
鋭敏感覚	★							
効果：								
獣の直感	★							
効果：								
猫の瞳	★							
効果：								
効果：								

----出自：天涯孤独１----
小学5年生の頃、親友と大型ショッピングモールを訪れたキミは、幸運にも福引で一等賞を引き当てた。2世帯分の旅行券だ。
皆既月食に合わせた天体観測のツアーで、日帰りだが豪華な寝台特急に乗ることができるという。
月にも星にも興味はなかったが、親友の妹が無類の電車好きであったために、キミと親友は大喜びで互いの家族に報告した。
しかし旅行当日、乗客の誰もが皆既月食を見ることはなかった。行き先に向かう途中に、通過中だったトンネルが崩落したのだ。
キミは翌日の夜病院で目覚めることになる。キミと親友の家族は瓦礫に押しつぶされてなくなったのだというが、キミには肝心の記憶がなかった。
何も覚えておらず、列車に乗り込んだ記憶さえ曖昧だ。キミは現実味のない無力感に苛まれて絶望した。

----経験：死と再生----
キミの親友は決してキミを許しはしなかった。彼は病室のドアを勢いよく開けると、ベッドに寝そべったままのキミに馬乗りになり首を絞めた。
キミは抵抗せずに死を受け入れようかと一瞬思案したが、首を絞めつける異様な力の強さに我へと返った。親友の体はあちこち包帯で包まれており、無論腕も例外ではない。彼を動かす恨みや絶望の衝動をどう加算しても、ボロボロの幼い腕にそんな力があるはずがないのだ。
親友の瞳は怪しく鈍く光っていた。この世のものとは思えないほどに。
キミは目が眩むほどの恐怖と神秘に思わず固く瞼を閉じ、息一つできないままがむしゃらに激しく抵抗した。
次の瞬間、親友の体は宙に吹き飛び天井に激突していた。痛む首元を指先でなぞると、本来あるはずのない固い感触があった。
まるで鋼鉄のような固い感触だ。

----出自：天涯孤独２----
かつての親友が意識を失って倒れたあと、母方の祖母がキミを引き取りに来た。キミは怪我の回復が早く早々に退院した。別れ際に親友へ手紙を書き残したが、騒ぎを起こしたために病院の規則で顔を合わせることはできなかった。
祖母は若くに夫を亡くし、遠い片田舎で静かに暮らしていた。キミの存在は祖母にとって大きな生きがいでもあった。
キミが祖母の元で3年余りを過ごし中学2年になった頃、祖母は重い病にかかり次第に衰弱していった。